

症例（図2）は16才、Stage VII、筋力テストは僧帽筋1、三角筋1、上腕三頭筋2一、上腕二頭筋2一、坐位で抑制帯が必要、食事動作は前腕を高いテーブルの縁を支点とし左手で補助していたがBFOを用いることによって普通のテーブルの高さで食事や書字が可能となった。このように食事、読書、タイプ、電話、作業療法などにおいてBFOは効率的な上肢筋の補助機構として利用される。駆動力源としては重症者には外力導入として筋電を利用した電動式機構が将来可能である。また、CO₂ ガスを用いた駆動装置をとり入れることもできるので今回は機構について実験と試作を行った。更に改良を重ねる予定である。

4. 筋ジストロフィーの装具療法に関する研究

徳島大学

松 家 豊 小 松 忠 雄

杉 口 利 彦

徳島療養所

奥 村 建 明 白 井 陽 一 郎

1. 下肢装具に関して

徳大式バネ付長下肢装具が昭和40年に開発され過去11年間に60例に使用した。その効果は歩行の再獲得のみならず下肢、脊柱変形の発生、増悪防止、ADL、心理面への好影響、介助の軽減などに有効であった。今回、追跡した26例の装具歩行期間は平均3年5ヶ月（1年2ヶ月～5年11ヶ月）、装着時年齢は平均11才6ヶ月（9～15才6ヶ月）、平均15才の時点で装具歩行の限界に達した（図1）。

下肢装具はD型、848人（全国17施設）のうち47人（5.5%）が使用している、（昭52.3）装具歩行訓練と心機能との関係は心機能図についての実験結果から10分間連続歩行では問題なく20分間歩行で影響がみられた（第14回日本リハビリテーション医学会で発表、1977.5）

2. 脊柱変形に関して

脊柱変形には早期から姿勢の管理に重点をおいた予防対策が必要なことを強調してきた。先天性筋ジストロフィー患者には坐位装具が訓練と併行し有効である（図2. D）、歩行者のL・G型ジストロフィー側弯に対してはいかなるブレイスも躯幹の運動を制限し歩行パターンをくずすので坐位装具のほかは成功しなかった。

Duchenne 型に対しては可撓性のある後側弯に坐位装具の適応がある。現在の改良した躯幹装具（図 2 C）は骨盤部の固定のため十分に採型されたオルソレンによる骨盤帯部と連結された両側支柱には後方30°制限の関節をつけ、頂椎部に一致したパットにより彎曲の矯正を行い、躯幹の運動性をもたした、股関節はフリー関節とし大腿中央までオルソレンによるシャーレを作り坐位での下肢々位の可動性をあたえた。即ち、側弯の矯正効果と運動訓練の効果の装具に比べて優れた点をもっている。

図 1

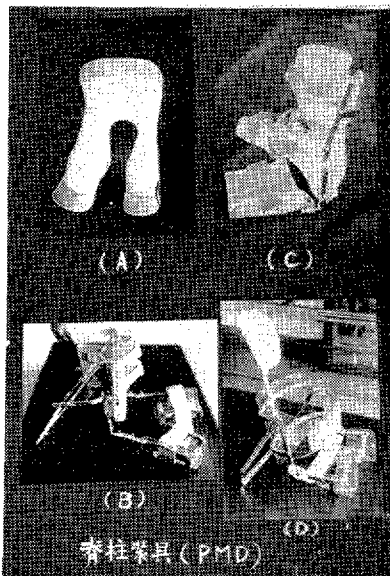
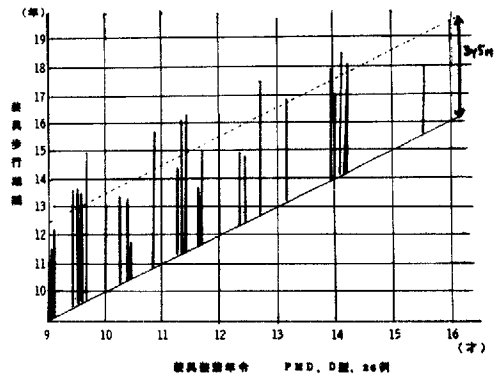


図 2

- (A) 車椅子用、革製
- (B) ベッド上用、プラスチック製
- (C) 改良型、オルソレン製（説明本文）
- (D) 幼児先天性用

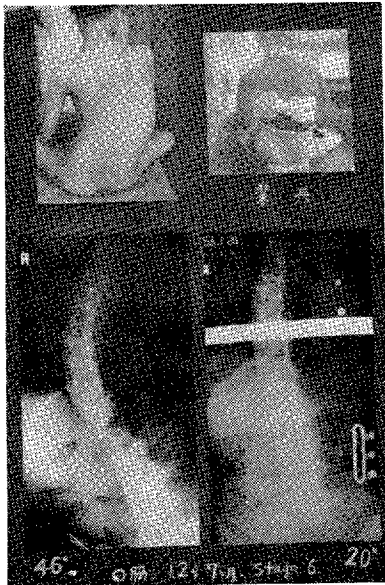


図 3

12才7ヶ月 Stage VI

左上、 装具なし

右上、 装具装着

(改良型)

左下、 装具なし

側弯46°

右下、 改良型装具

側弯20°

5、「いざり」および「四つ這い」のための移動用車 第2報—「四つ這い」のためのクローラー

国立療養所下志津病院

齊 藤 篤 松 下 登

齊 藤 敏 郎

筋ジストロフィー症児には病態進行と共に「四つ這い」や「いざり」移動に対する移動用具または移動用車の適応が考えられる。前回は「いざり」児に対しキヤスター付き扁平な座板を考察しその有用性を報告した。今回は「四つ這い」に際しクローラーに類似する移動用車を試作した。「四つ這い」移動に際し Stage 5 以上では肩関節や股関節部構成筋群は顕著に荒廃し、大関節は加重に際し亜脱臼を示すようになり、移動距離も減少し移動後は休息を要するようになる。これに対し、既製のクローラーを用いその有用性を検討してみた。その結果移動はかえって不能に

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

1. 下肢装具に関して

徳大式バネ付長下肢装具が昭和40年に開発され過去11年間に60例に使用した。その効果は歩行の再獲得のみならず下肢、脊柱変形の発生、増悪防止、ADL、心理面への好影響、介助の軽減などに有効であった。今回、追跡した26例の装具歩行期間は平均3年5ヶ月(1年2ヶ月~5年11ヶ月)、装看時年齢は平均11才6ヶ月(9~15才6ヶ月)、平均15才の時点で装具歩行の限界に達した(図1)。